

「新聞を活用して、相手意識をもち、表現する力を育てる指導はどうあったらよいか。」
 ～新聞の書評をモデルとした書評作りを通して～

指定校2年次 南木曾町立南木曾中学校 太田裕一 白鳥志津子 近藤伸一 立花法真沙 小林義和

1 本校の新聞活用（N I E）の現状

I 指定校1年次

「自分から進んで学習に取り組み、学力を身につけていく生徒の育成～かかわって課題追究していくための支援・指導はどうあったらよいか～」という全校研究テーマを受け、N I E研究部会を立ち上げて研究を行った。約半数が新聞を購読していないという実態ではあったが、新聞に触れる機会をつくり、スピーチ活動などを通して新聞が身近に感じられる環境づくりから実践を行った。また、1学年において、小学6年生に向けた学校紹介新聞作りを通して、伝える相手を意識して情報を発信する方法を知るための授業実践を行った。

II 指定校2年次

1年次の実践と課題を受けて、新聞活用をより深めていき、この2年間で得られたことが教科学習をはじめ、学校教育活動の中で継続していけるものになるように取り組んできた。

① 新聞をすぐに手にとることができる環境づくり

昨年と同じように、教室棟2階、3階の階段踊り場に長机を設置し、生徒が自由に閲覧できるように閲覧スペースとしたが、手にとる生徒がなかなか増えていかないため、提供していただいた7紙を各教室に振り分け閲覧できるようにした。新聞の設置方法等は各クラス様々であるが、各教室で毎朝新聞を手にする生徒や職員の姿から、新聞に興味を示していく生徒がいた。新聞記事の内容がふとした会話の中でされたり、3学年においては、受検へ向けて社会情勢を知ったりする手段として活用された。



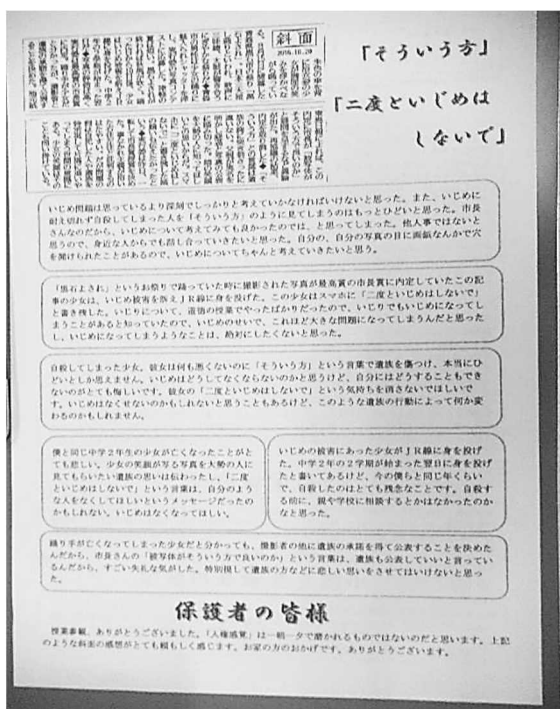
② 読み書きノートの実施

昨年から引き続き行われている「読み書きノート」であるが、2016年度は「斜面」についての感想を書くことに重点を置くことを生徒に伝え実施した。「斜面」の記事によっては、感想を学級通信等で話題としたり、他学年の感想を紹介したりすることを行った。できるだけ文章量が増えてほしいということ、1つの記事から自分とは違った感じ方もできるのだということを知ってほしいと思い行った。

3年生の文章量を見て、自分の文章量を意識しだす2年生がいたり、自分とは違う部分に注目した感想を読み、改めて「斜面」のできごとに関心をもつ生徒がいたり、多くはないが反応があったことは成果の1つかもしれない。

また、修学旅行へ向けての平和学習を行っている際に「この世界の片隅に」について書かれている「斜面」が掲載された。時期が重なったこともあるが、広島について学習していた生徒たちの反響が大きかったのも事実である。「斜面」を読んで図書館に本を借りに行った生徒、読み書きノートだけではなく生活記録にも感想を書いてきた生徒もいた。また、内容について話をしている生徒から「斜面にあったじゃん」という言葉も聞かれ、内容と記事を照らし合わせて話をしていた。

2学期後半、「今週の斜面は何ですか」「またトランプ氏ですか」などと、斜面の内容を気にする生徒も出てきた。継続して行っていければと思う。



保護者の皆様

授業新聞、ありがとうございます。「人権週間」は一歩ずつ進めるものではないかと思っております。上記のような科書の感想としても読んで結構です。お返事の方をお待ちしております。

2 研究の概要

1 学年 文法学習における新聞の活用

「テスト問題作成に挑戦しよう（文法編）」

1年生は、文を文節に分けたり、単語に分けたりすることを家庭学習の中にも取り入れた。自分で小説の文章を写して文節や単語に分けることをするなど、自分なりに工夫して文法の学習をしようとしている。また、文節どうしの関係（主・述の関係、修飾・被修飾の関係、並立の関係、補助の関係など）も

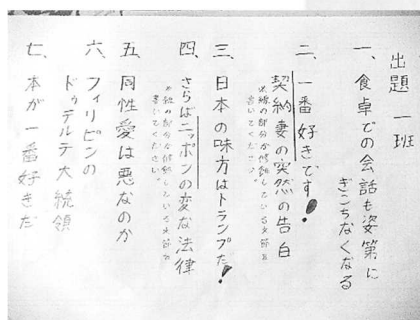


文章から探してみようとするなど意欲的に取り組む生徒が多い。しかし、小説の中の文には話し言葉が使われていることもあり、文節や単語に分けようとするとき難しくなってしまうと訴える生徒もいた。そのような中で、教室に新聞が置かれるようになり、新聞の記事の中から例文を探すこともするようになった。そこで、新聞から文節どうしの関係を探し、問題作り



を行った。

班で新聞を開き、自分の興味のある記事から問題を作ろうとする生徒もいれば、自分が探している文節どうしの関係がないか、記事を風潰しに読み始めた生徒もいた。新聞の広告欄から問題を作成した班もあれば、新聞から例文を探して問題にした班もあった。



○生徒の感想

- いつも読んでいる新聞に多くの文法が使われていることがわかった。
- 文章がたくさんあるから、その中から、文節の関係を見つけるのは難しかったけれど、教科書とはちがう楽しい文もあって楽しかったです。
- 教科書での問題で出てきたようなやつよりも難しいのがたくさんあった。
- 意外に文節どうしの関係は見つからないものだなと思った。
- わりと身近なところに色々な関係がたくさんあって、探すのが楽しかった。
- 新聞から抜き出すのは簡単でしょと思っていたら、案外見つからなかったのが大変だった。新聞をたくさん読めるいい機会になった。
- 難しい言葉や漢字が少し知れたので良かった。問題を探すとすると、意外と見つからず大変だった。新聞はあまり読んだりしないので、探しながら最近はこのニュースで話題になっているんだということがわかってよかった。
- 新聞で問題を作ってみて、新聞の文章の中にもいろいろな関係があるんだなと思った。
- 言葉に、文に対してすべてに関係があると思うと、文法の面白さがよく分かって良かったり楽しかったりしたので、もっと深く知りたいと思った。
- 思ったよりたくさんの文節どうしの関係があったことにおどろいた。さがしてみたらたくさんあるということが分かったので、普段から意識してさがしてみようと思います。
- 文が多くあったし、長くつなげてあったので、接続の関係や独立の関係がたくさんあったが、主語のない文が多かったのが、それらの関係を探るのが難しかった。

3 学習指導案

1 単元名 中2 国語 「目指せ！全員新聞掲載！！書評を書き上げよう！！！」

2 単元設定の理由

2学期初めに行った意見文の学習において、生徒は教師がまとめるための字数を提示すると「どうしてそんなに書かなければいけないのか」という思いを表出した。意見文が書きあがり、お互いに読み合い、アドバイスし合う場面では、誤字や助詞の使い方の誤りを指摘することはできるが、内容や表現については「内容がよかった」という程度で、どこがどのように良いのかという具体的なアドバイスをすることはなかった。また、表現の工夫についても同様で、なぜわかりやすいのかということにまでアドバイスが及ばなかった。なぜ生徒がそのような姿をみせるのか、なぜ他者に伝えることに対して主体的になれないのか、生徒の学びの姿と教師としての自分自身の指導のあり方を見つめ直してみると、まず生徒の仲間の選定したテーマに対する知識の乏しさや、関心の低さにあると考える。そのような中で、アドバイスをする側も書き手の文章に寄り添い、それを根拠に意見を述べるということには抵抗があって当然かもしれない。しかし、生徒は自ら根拠を見いだしたり、進んで書き表したりすることが全くできないわけではない。教科書教材で叙述を根拠にして自分の考えをまとめるという学習活動では、進んで学びを進めている姿があるからである。互いが学習問題を共有していること、そしてそのかぎとなる学習課題が生徒の中で納得していると生徒は進んで学んでいく。意見文ではこういった要件を満たせていないため生徒の追究が低調になる、教師主導になりやすくなると考え、今までの支援のあり方を反省した。また、ある生徒は、生徒会引き継ぎに向けて「2年間やってきているので、〇〇委員会の委員長がやりたいです」とはっきりと自身の思いを他者へ発信することができた。このことから、自分自身の思い入れのあること、つまり必要感のあることや「2年間やってきた」という自分の中に明確な根拠がある思いについては自ら発信できるのではないかと考えた。

ある日、生徒は教室に置かれていた新聞を眺め、知り合いの小学生が載っている記事を見つめ「新聞に自分の名前が載ったら嬉しいですよ」とつぶやいていた。また、昨年度、小学6年生に向けて学校紹介新聞を作った際は意欲的に取り組んでいたことを聞いている。相手意識が明確になると、必要感をもって学んでいくことができるのではないかと考えた。そこで「メディアの書き手」になり、書いた文章を実際に新聞社に送り、掲載してもらえるか評価してもらうことを生徒に投げかけることにした。そのことを生徒と教師とで共有した上で、より良い書評とはどのような書評かを生徒が見だし、伝え合い、共有できるようにすることで、それが仲間の文章を評価する際の生徒の基準になると考えた。全員で共有した評価基準を基に書評を書き進めていく中で、自ら選定した本の作者の意図やこめられた思い、それを根拠として書評をまとめられるのではないかと考えた。そのように生徒にできうる限り追究を委ねていくことで、より具体的に他者へ発信するために、粘り強く自分の文章の内容を深めたり、構成し直したりしていくのではないかと考え、本単元を設定した。

3 単元目標

- ア 新聞の書評から、書評とは何かを知り、それを分析することを通してこれから自分が書いていく書評についての見通しをもつことができる。(関心・意欲・態度)
- イ 書評を書くために多様な方法で材料を集め、自分の考えをまとめることができる。(書くこと)
- ウ 自分の書評を「起承転結」を軸に伝えたいことが明確になるように文章の構成を工夫することができる。(書くこと)
- エ 書評を互いに読みあい、文章の構成や材料の活用の仕方などについて、助言をしあい、自分の書評をよりよくしようとするすることができる。(書くこと)

4 単元展開

過程	学習活動	生徒の意識 (◎) 教師の支援 (・)	○評価	時間
導入	1 単元の流れに見直しをもち、書評とは何かを理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞に投稿する書評をこれから作っていくことを伝える。 ◎書評とは何だろう。読書感想文と何が違うのだろう。 ・新聞における書評を紹介し、これからの展望が持てるようにする。 ・書評に対して「やってみたい」という意欲をもてるようにする。 ◎読書感想文は本を読んで思ったことを書いたもの。書評は紹介している。 ◎読書感想文は自分が本を読んで思ったことを思うままに書いたもの。本を読んだあとに書くもの。 	○新聞の書評を読み、読書感想文との違いを明確にし、これからの学習の見通しを持つことができる。(ア)	1 2
	2 書評の基本を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ◎書評は著者のことまで書いてある。値段も書いてある。 ・新聞にある書評から、基本の型は起(本の簡単な説明)承(あらすじ)転(著者、本の魅力と特徴)結(おススメの理由、おススメの言葉)であることを紹介し、新聞にある書評を分析することを通して、自分が書く書評について理解できるようにする。 ◎「起」の部分は本の紹介を簡単にしている、「承」がもっと詳しく内容を説明している。 ◎「転」はどう説明したらいいのかわからない。「結」はまとめっぽい。 		
<p>新聞社の方に「おもしろい、新聞に載せたい」と言わせる書評を書こう。</p>				
展開	2「走れメロス」を通読し、書評を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・「走れメロス」を書評を書くつもりで読んでいくように促す。 ・基本の型として起(本の簡単な説明)承(あらすじ)転(著者、本の魅力、特徴)結(おススメの理由、おススメの言葉)のそれぞれを書くための材料を整理する。 ・作者や作品の背景など、何を調べるのかを確かめられるようにする。 ・自分が集めたり、整理したりした材料をもとに文章化する ◎作品の背景を書くために、太宰治について調べてみよう。 ◎「起」の部分はメロスとセリヌンティウスの友情の物語というふうにしてみよう。 	○「走れメロス」の書評を書くために、自分が必要な材料を集めることができる。(イ)	3 4 5
	3 書評を互いに読んだり、助言をしたりしながら自身の書評の推敲を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を読みあい、お互いにアドバイスし合えるようにする。 ・視点を定めてから仲間のもとへ行くように促す。 ◎文章の構成が起承転結になっていてわかりやすい。 ◎「起」の部分にもう少しインパクトのある書き方をしてみたらどうだろう。 ・助言を参考に書評の推敲を行う。 	○構成に気をつけながら「走れメロス」の書評を書くことができる。(ウ)	6
	4 完成した書評の相互評価を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートをもとに書評の相互評価を行う。 ・相手に伝えられるようにするためには、どのようにすればよいか意見を交換し合う。 ◎○○さんの書評は構成がわかりやすかったから、言葉遣いを気をつければもっと良くなると思う。 	○書評をお互いに読みあい助言しあうことができる。(エ)	
			<p>相互評価の基準</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誤字、脱字、句読点等が正しく使われているか。 ・文章を起承転結で構成し、工夫がされているか。 ・自分が書評を読んでどれだけその本を「読みたい」と思えたかを%であらわし、その理由を書く。 	7
	5 新聞に投稿する書評を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの活動を想起したり、新聞の書評を思い返したりすることで、相手に伝わる書評が書き出せるようにする。 ◎私はこの本が好きだから、この本についての書評を書きたい。 	○書評のために必要な材料を集めることができる。(イ)	8 9

	6 書評を読み合い助言をし、推敲を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ◎「起」の部分にインパクトがあると、その後も読む気になるから、最初にインパクトのある書評が書きたい。 ・座席表を参考に、自分と同じ作者や、同じジャンルの本についての書評を書いている人と書評を読みあい、アドバイスをし合う。 ◎私と同じ作者の本について書いている人の書評を聞いてみたい。 ◎同じジャンルの本についての書評を書いている人のものを聞いてみたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○構成を意識しながら相手意識をもった書評を書くことができる。(ウ) ○相手からの助言を参考に自分の書評の推敲を行うことができる(エ) 	10 本 時
終 末	7 書評の相互評価を行い、書評を完成させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・書評を完成させる。 ◎前回読んでもらって、もう少しなおしたいところがあるから、もう1回「承」の部分を書き直してみよう。 ◎書き直してみたから、もう1回誰かに読んでもらおう。 	○仲間の助言から自分の書評をよりよくしようと見直し、書評を完成させることができた。(エ)	11

5 本時案

(1) 主眼

自分が人に薦めたい本の書評を書いた生徒たちがお互いに書評を読み合い、自分の書評を見つめなおしていく場面で、同じ作者や同じジャンルの書評を書いた仲間の書評を読んだり、助言を受けたりすることを通して、仲間の書評の工夫した部分を自分の書評に生かそうとしたり、仲間からの助言を受けて推敲したりして、自分の書評をよりよいものにしようとする事ができる。

(2) 本時の位置 全11時間中の第10時

前時: 自分の薦めたい本の書評を書いた。

次時: アドバイスをもとに書評の推敲を行い、書評を完成させる。

(3) 指導上の留意点

- ・誰が何を調べたかが分かるように全員の調べた内容を一覧にしておき、学習活動2で配布できるようにする。
- ・学習活動3で自分の書評をまとめ直したいと願う生徒には、書き直すための学習カードを配布できるようにする。

(4) 展開

過程	学習活動	予想される生徒の反応や意識	教師の支援(・)評価	時間
導 入 展	1 自分の書評を振り返り本時の学習の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・推理小説についての書評を書いたけれど、他にも同じようなジャンルの書評を書いた人はどのようにまとめたのだろう。 ・私は○○という作者の本について書いてみたのだけれど、同じ作者について書いた人は、作者のどのような紹介の仕方をしたのだろう。 ・インパクトのある「起」が書きたいけれど、○○さんはどんな風に書いたのだろう。 	・前時、自分の薦めたい本の書評を書いてみて、「なんとなく上手くない部分がある」「作者について何を書いたらいいのかを迷っている」という意見を全体に広げ、仲間と意見交換をし、自分の書評に生かしたいという意欲を高められるようにする。	10
		学習問題 自分の書評をよりよいものにしよう。		
	学習課題	仲間と書評を読んだり、助言を受けたりしながら、自分の書評を推敲していこう。		

開	<p>2 仲間と書評を読み合い、自分のものとの異同に注目したり、助言をし合ったりする。</p> <p>3 自分の書評を推敲し、考えや根拠を見つめ直す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 私は「転」の部分が不安だから〇〇さんのところへ聞きに行きたい。 まずは〇〇さんのところへ行って書評を読ませてもらいたい。 同じ作者の作品の書評を〇〇さんが書いているから〇〇さんのところへ行ってみたい。 私は作者についてあまり書評の中に入れていなかったけど、入れたほうがわかりやすくなるかもしれない。 ネタバレしないように書いたつもりだったけれど、読んでもらったら犯人がわかってしまったから、書き方を工夫しないとイケない。 「転」の部分をどう書こうか迷っていたけれど、〇〇さんのを読んでなんとなく分かった気がする。 私は「結」の部分が長くなってしまったけれど、〇〇さんのものを読ませてもらったなら、もう少し短い方が読みやすくなるかもしれない。 なんとなく考えがまとまったから、もう1回自分の書評を書き直してみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分が情報を得たい人のところへ自由に行っていっていいことを伝え、行動を促す。 「起」「承」「転」「結」の視点を定め、仲間のもとへ行くように促す。 席に戻り、自分の書評を推敲しようとする生徒に今何をしようとしているかを尋ね、仲間から得たことを自分のものに生かしたいという思いを全体に広めていくことで、自分の書評に仲間から得たことを加えることができるのかを検討できるようにする。 	
終末	<p>4 本時の学びを振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇さんに「転」の部分についての助言を受けて書いてみたらうまく書くことができた。 〇〇さんと本の作者が同じだったので、聴きに行ったら私とは違うことを書いていた。〇〇さんが書いていたことも少しつけ加えさせてもらった。 	<p>仲間と書評を読みあい助言内容を自分の考えの根拠として受け入れ、自身の書評に生かそうとしたり、推敲したりして、書評をよりよいものにしようとするのができたか、学習カードや発言で評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 仲間から助言をもらったり、互いに書評を読み合うことを通して、自分の書評をどのようによくしようとするのができたのか、具体的に書くように促す。 	10

○書評作りにおける「起承転結」

書評を作るにあたり、まずは「起承転結」という構成で書いていくことを確認したうえで、実際に新聞に掲載されている書評を全員で分析した。(「オールドテロリスト」村上龍 豊崎由美 評)

「起」(生徒の分析から)

- 本がどのように作られたかが書いてある。
- 作品についての大まかな情報。

「承」(生徒の分析から)

- 本の内容を少しだけ紹介していて、面白そうなところを書いている。
- 本の話のあらすじ。どのような感じの話なのかの説明。

「転」(生徒の分析から)

- 龍さんの本の書き方をほめている。評価している。
- 著者の文の書き方、伝えたいであろうこと(?)

「結」(生徒の分析から)

- 本をすすめる理由。
- 自分のこの本に対しての感想、おススメできる理由。

6 授業の実際

N生の学びから

N生は「走れメロス」の書評を書いた際の意見交換から、「起」で読む人をひきつける書評が書きたいと考えていた。そのことから、自身もひかれた本の最初の部分をそのまま引用し、読む人に伝えていこうと決めた。その書き出しに自身も満足していたため、「起」の部分はうまくいったと感じていた。しかし、「転」「結」の部分、特に「転」の作者についてを書こうとしている部分がうまくいかないと感じていた。

座席表を参考に「転」「結」がうまくいったと書いている生徒に線を引き、意見交換とともにメモを交換していく。また、うまく書けたと感じている「起」や「承」についても同様に感じている生徒のもとにも意見を求めた。



HAPPY BOY(書名)

ジェリー・スピネッリ(作者) 文学(ジャンル)

◎「起」「承」がうまくまとめられた。(うまくいった点)

△「転」「結」が早く終わってしまい、本や作者の良さが書けなかった。(うまくいかなかった点)

交換したメモから

- ・「結」がおもしろいとおもったから、おすすめしている所が私も読んでみたいと思った。
- ・作中の表現を用いて書いているので良いと思った。自分でも読みたくなった。
- ・主人公を軸にした物語の構成が分かりやすかったし、後半の部分がカッコよかった。
- ・「起」の始まり方が、とても気をひくような始まりでいいと思った。
- ・「起」で興味をひくような書き方だった。

メモの交換までを終えたN生は、I生と書評を読みあう中でヒントを得て、「転」の部分の推敲を行っている。

N生の「転」の部分には作者の簡単なプロフィール、受賞歴等が詳しく書かれていたが、I生の書評は、作者について書かれている分量はN生の半分であった。また、I生は、構成を考えるうえで、作者についてを「起承転結」の「承」の部分に位置づけた。これが、N生にとっては発見だったようで、I生に対してのメモに『「承」のところで作者のことを説明していて、「転」のところであらすじを話していると思った。でも個性が出てとてもよかった。流れが意外と自然。』と書いて渡している。

N生は作者について書いていた「転」の部分を半分に減らし、代わりに「結」の部分で本の原題について言及する文を増やしている。これは、I生の構成を参考にしている。

5人の生徒と書評を読みあい、メモを交換しあったN生は本時の振り返りで「自分が困っていた転や結についての感想を書いたくれた人がいて、困っていたことが解決できたので良かったです」「自分でうまくいったところをたくさん意見を出してもらえたり、転や結のまとめ方を人の読んで自分のと比べることができて良かったです」ということを書き、この時間を終えている。

この時間を通してN生は、うまくいかないと感じていた「転」の部分に対して「解決できたのでよかった」と述べている。具体的にメモにアドバイスが書かれていたわけではないが、書評をお互いに読みあう中で解決の糸口を見つけることができたのだと考える。また、自身がうまくいったと感じていた部分についても、「うまくいったところをたくさん意見をだしてもらえた」と書いており、本人の中で自信をもって「うまくいった」と言える根拠になっていければと思う。



7 研究のまとめと今後の課題

「新聞掲載を目指す」ということが、生徒の意欲に大きくつながっていた。試作前に、新聞に掲載されている書評から、「起承転結」のそれぞれの部分に何が書かれているのかということ自分たちで分析したことで、生徒が「起承転結」という構成を理解し、前向きに取り組むことができた。また、生徒自身が推敲していく際の視点ともなった。

教科書教材である「走れメロス」を全員で試作したことで「書評」への理解が深まり、自分たちが紹介したい本の

書評への準備となった。国語の読解教材としての「走れメロス」の扱いについては反省点があるが、全員で試作し、意見交換を行ったことで、お互いの気づきを共有し、「次はこう書きたい」「〇〇さんのように工夫したい」と、次の書評への意欲にもつながった。

時間が許されるのであれば、試作の段階で新聞社の方に評価をいただきたい、ということも考えたが、国語の授業の中に全てを盛り込むことは難しく叶わなかった。試作の時点で、生徒がアドバイスしやすいように「起承転結」以外の視点を定めておくべきであった。「相手の書評を読みたい」「自分の書評を読んでもほしい」という、こちらが考えていた以上に前向きな生徒の姿があったため、新聞社の方は難しくても、やはり第三者の評価があれば、以降の意見交換もさらに活発なものになったのかもしれない。

「書く」ということに苦手意識をもっていたり、文字数や原稿用紙の枚数だけを気にしたりしてしまう生徒も、今回の授業の中では、そういった姿を見せることなく取り組むことができた。それどころか、「書き方がわからない」「どうすれば伝わるのか」と、相手を意識した書き方を悩んでいる姿さえあった。

実際に新聞を購読している家庭は多くはない。しかし、2年間多くの新聞に触れられる環境にあったことで、生徒たちの意識は確実に変わってきている。「新聞掲載」ということは、どのようなことを意識しなければいけないのか、新聞を読む人というのはどのような年代が多いのか、新聞が身近にあったことで、相手意識が自然と芽生えていた部分もあったように思う。

今回のように授業時数の多くを使って授業を作っていくことは難しい面がある。しかし、授業の補助教材として日常的に扱っていくことは可能かもしれない。自分自身もそういったことを柔軟に考え、授業の中に取り入れていきたい。